

報告

—現代 GP「医療系学生の保育所実習による子育て支援」— 乳幼児との継続交流による体験型コミュニケーション授業 実施報告と終了時の評価

長宗雅美¹⁾、寺嶋吉保¹⁾、小野香代子¹⁾、山田進一²⁾、黒葛原健太郎³⁾、安井夏生¹⁾、高塚人志⁴⁾
¹⁾徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス(HBS)研究部医療教育開発センター、²⁾徳島健生病院小児科
³⁾中部学院大学短期大学部幼児教育学科、⁴⁾鳥取大学医学部総合医学教育センター学部教育支援室

(キーワード: 人間力、コミュニケーションスキルトレーニング、保育所実習、役立ち感、専門準備教育)

Evaluation of a course in communication between medical students and community infants and children

Within the Medical Student's Child Care Support Program

(Key words: human skills, communication skill training, child care, relevance, basic professional education)

1. はじめに

現代の大学教育では、従来からの専門力の育成と共に、人間力をバランスよく育むことが求められている。「人」への援助を目的とする医療系学部では、その期待は特に強い。

これまでに我々は、学生同士のロールプレイや模擬患者セッションなど様々な方法を活用して医療コミュニケーションの授業を行ってきた。しかしその場限りとなることが多く、行動変容にまで結びつきにくいというのが実感であった。学生自らがコミュニケーション力不足に気づき、自ら学ぶモチベーションを高めるカリキュラムを模索していたところ、鳥取大学医学部 高塚人志准教授の「ヒューマン・コミュニケーション」授業に出会った。2005年、鳥取大学の実践視察を重ねるうちに、このプログラムにこれまでにない有用性を感じ、徳島大学での授業企画に至った。

この授業は、医療人としての人間形成を目指し、実践的な経験・実習の場を保育所に設定し子育て支援の地域貢献を行う中で人間力を培おうとするものである。(図1)

この授業は文部科学省 平成18年度大学改革推進事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(地域活性化への貢献)」に採択され、平成20年度までの3年間の補助金を得て行なわれている。平成19年度前期までの実施内容と評価を報告する。



図1 取組の全体像(補助金申請資料より)

2. 取組の概要(図2)

この取組は次の4つの要素から構成されている。

- ① 学内演習(4回)
 - 特別講演
 - ロールプレイによるコミュニケーションスキルトレーニング
 - 保育所実習準備
- ② 地域における保育所実習(10回)
 - 特定のパートナーとの1対1の交流(地域の保育所に週1回3時間、10回)
 - 医療系教員の配置
- ③ 児童館における子育て支援実習(1回)
- ④ 振り返り(最終授業)



図2 取組の概要

3. 取組の目的

- ① 継続的な乳幼児との関わりの中からホスピタリティ・マインドを実体験として学び、自らの人間関係を見直す機会とし、将来、真に患者と向かい合える医療者を育てる一助とする。
- ② 学生の交流を通して、地域の子育てを支援する。

4. 取組の目標

- ① 社会人として、基本的なマナーを理解し実践することができる。
- ② 相手の気持ちを考え行動することができる。
- ③ 自分の考えや気持ちを相手に伝えることができる。
- ④ 仲間の様子に目を向け、共に喜び合い、励ますことができる。
- ⑤ 乳幼児や仲間、指導者との交流を通し、自己を振り返ることができる。

5. 期待される効果

- ① 学生への直接的な効果
 - ・ 基本的なマナーの習得
 - ・ ホスピタリティ・マインドへの気づき
 - ・ 「役立ち感」「自己肯定感」の実体験
 - ・ 仲間への自己開示、信頼関係の構築
 - ・ 健康な子供の理解(専門準備教育)
 - ・ 自分の幼少時代の追体験
- ② 地域の保育所への効果
 - ・ マンパワーの充実による保育の向上
 - ・ 保育士への啓発: 学生の関与による観察、内省
 - ・ 保護者への啓発: 子供と学生の関わりからの新たな気づき
 - ・ 育児健康相談: 担当する教員(医師、看護師、保健師)による観察、助言
- ③ 長期的な視点から期待する効果
 - ・ 子供の存在を身近に捉え、将来の育児、

出産に対する肯定的理解(少子化対策)

- ・ 小児周産期医療への関心

6. 取組の実施状況

<平成18年度>「医学入門」選択コースとしてトライアル実施した。

後期・医学科1年生20名受講

<平成19年度>全学共通教育科目として本格実施した。

前期・医学科1年生45名受講

- ・ 保健学科1年生70名受講

後期・医学科1年生50名受講

<平成20年度>19年度と同様に実施予定

前期より実施枠拡大を計画中

7. 具体的な授業展開

授業は全16回とし、表1のように展開された。授業評価は全授業を通しての出席状況、レポート提出状況及び内容、授業に取り組む姿勢・態度から総合的に判断し、試験は行なわなかった。

表1 授業内容

		内容
1	学内演習Ⅰ (図3)	特別講演「ホスピタリティ・マインドへの気づき」 講師: 鳥取大学医学部 高塚人志准教授 各種アンケート記入
2	学内演習Ⅱ (図4)	コミュニケーション授業 ・「聴く」こと ・ホスピタリティを学ぶ 実習準備-パートナー決定 プレゼント作成(図5) ゼッケン(名札)作成
3	学内演習Ⅲ	コミュニケーション授業 ・ノンバーバルコミュニケーション ・協力について 実習準備-パートナーと保護者に宛てた手紙作成(図6) 基本的マナーについて 保育所実習諸注意

4	交流実習 1	乳幼児との交流実習 *プレゼントを渡す。
5	交流実習 2	乳幼児との交流実習
6	交流実習 3	乳幼児との交流実習
7	交流実習 4	乳幼児との交流実習
8	交流実習 5	乳幼児との交流実習
9	交流実習 6	乳幼児との交流実習
10	学内演習IV	実習中間振り返り ・コミュニケーションスキルの確認 ・仲間の交流の様子を知る。 保護者に宛てた手紙作成(図7) クリスマスカード作成:H19後期(図8)
11	交流実習 7	乳幼児との交流実習
12	交流実習 8	乳幼児との交流実習
13	交流実習 9	乳幼児との交流実習
14	交流実習 10	乳幼児との交流実習 *お礼の手紙を渡す。(図9)
15	児童館実習	地域の児童館にて1日実習 ・初対面、複数の相手に対応
16	振り返り	授業を振り返り、自分へ宛てた「励ましの手紙」を発表する。



図3 高塚人志准教授による特別講演



図4 学内演習「自分の想いを伝える、聴く」



図5 パートナーへのプレゼント

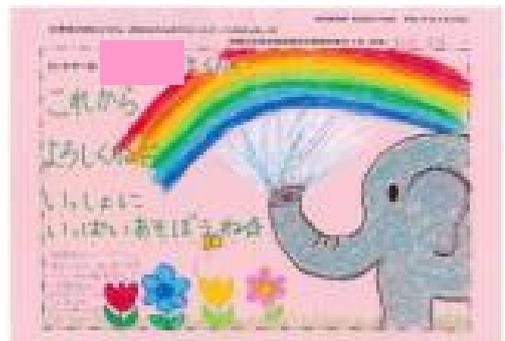


図6 まだ見ぬパートナーへ宛てた手紙



図7 実習中間保護者に宛てた手紙



図8 パートナーを想い、クリスマスカードを作る



図9 パートナーと保護者に宛てたお礼の手紙

8. 保育所実習実施要領

保育所実習の事前準備として表2に示している書類を作成した。

表2 準備書類

書類	対象	内容
協定書 ・保育所実習 ・児童館実習	保育所長と 学部長 市長と学長	保育所実習、児童館実習に関する協定 2部作成しそれぞれが所持する。
実習同意書	保護者	保護者に子供との交流に同意していただけるかを確認する。
記録映像使用に関する承諾書	保護者 (子供) 学生 保育士	交流の様子を映像として記録する為にその承諾を確認する。 拒否した方は撮影しない。
誓約書	学生	子供の個人情報秘守を確認する。 保育所に提出。
健康調査票	学生	学生の健康状態、感染症の罹患状況について確認する。 一部、入学時の健康診断結果を使用する。
健康診断結果提示に関する承諾書	学生	入学時健康診断結果を調べることの許可を確認をする。

学生は動きやすく、汚れても良い服装(ジャージ、Tシャツ、トレーナー等)とし、胸に名札として「ゼッケン」を縫い付けたエプロンを着用する。また、実習時は装飾品をはずすよう徹底する。

「ゼッケン」: ひらがなで大きく名前を書き、エプロンの胸に縫い付ける。これにより安全ピンで留める名札より、子供にとっての安全が保てると同時に、保育士・教員が学生の名前を確認しやす

くなる。実習中、学生を名前で呼ぶことが容易になった。

また、交流の写真撮影を拒否している子供のパートナーとなる学生のゼッケンは、文字の色を替えるなどして、その目印とした。

〈1〉特定乳幼児との1対1の交流

同一乳幼児との長期間交流であり、決して無責任な関わりをしないよう指導する。

パートナーは学生に年齢・性別を伝え、話し合いにより決定させる。交流する上で特別な配慮を必要とする場合(疾病、障害など)はその旨伝えるが、情報を与えるのは必要最小限にとどめる。交流期間中、パートナーは原則として交代しない。

交流をスムーズにスタートさせる為に学内演習にてパートナーに宛てて手紙(図6)を書き、事前に保育所に届ける。また、プレゼントを作成し(図5)、初回交流時にパートナーへ渡す。19年度後期には学内演習にてクリスマスカード(図8)を作成しパートナーに渡している。

実習開始時には毎回、カンファレンスを行い、当日の予定や注意事項を伝える。この時、子供、学生の欠席を確認し、欠席者があればその対応をする。特に、学生が欠席した際に、そのパートナーがひとりにならないよう留意する。

実習終了時にもカンファレンスを行う。この時には保育士にも参加していただき、意見交換の場とする。毎回数名の学生が一日の気づき、反省を発表する。

交流全体を通して、パートナーの気持ちを表情や言動からくみとり、どうしたら相手に寄り添うことができるか、よい人間関係を築けるかを考え、目標を立てて行動するよう指導する。

〈2〉保育実習の内容

通常の乳幼児の生活に寄り添うことを前提とする。学生との交流の為に特別な計画を組むことはしない。

〈3〉保護者とのつながり

全交流を通して、保護者の存在を意識できるよう指導する。

実習開始時には、保護者の実習に対する不安を軽減することも目的とし、学生がパートナーと保

護者に手紙(図6)を書く。手紙は教員が事前に届ける。19年度前期終了時に、「どのような学生さんか事前にわかると安心できる。」という保護者の意見があったので、後期には学生の写真を入れた手紙を作成している。

実習中間には、交流の様子や、学生の学び、思いを伝える為、保護者に手紙(図7)を書く。これに対し、返事をくれる保護者もあるが、これに関しては現在保護者の意思に任せている。

終了時にもパートナーおよび保護者に宛ててお礼の手紙(図9)を書く。そして、交流の様子を撮影した写真を1枚添えた。

<4>毎回のレポート提出

実習での学びを振り返るために、学生には毎回レポートを提出させる。自分自身の気づき、学びを言葉として整理し、読み手に分かりやすく文章化する練習にもなる。

学生の気づき、学びを保育所側と共有するため、毎回レポートを保育所に提出し、目を通してもらう。必要であれば、コメントをもらうこともある。学生の気づきをまとめ毎回「学習記録」を作成する。これは学生全員、保育所に配布する。

<5>医療系教員の配置

医療系の教員(医師、看護師など)が毎回現場で指導と安全確保にあたる。原則として、交流を見守り、学生自らの学びを大切にする。

交流がなかなかスムーズに進まない学生に対しては、適宜助言をあたえたり、励ましたりすることも大切な役割である。

また必要時、育児、健康相談を行なう。

9. 授業効果調査の方法

①学生の学びについて

1. 出席状況(表3)

2. コミュニケーションに対する意識調査(図10)

自分自身のコミュニケーションについての簡易アンケート(8項目)。

授業開始時と、終了時の2回調査する。

3. 授業を通しての自己変化に対するアンケート調査(図11)

4. 成長報告書(図12)

最終実習のレポートとして提出する。

学生がこの授業を通して、成長したと思われることを3つ、自由記載する。

5. 授業に対するアンケート調査(図13)

②保護者、保育士に及ぼした影響について

1. アンケート調査(実習終了時)

10. 結果

①学生の調査より(アンケート回収率:100%)

出席状況についてしてみると、本取組以前に行われていた「コミュニケーションの基礎」授業に比べ、約10%出席率が上がった。また遅刻者数は医学科1.57人、保健学科1.2人であった。(表3)

表3 出席状況

	出席率	遅刻数
2005年度(本取組以前の「コミュニケーションの基礎」授業)	89.4%	
2007年度医学科	98.2%	1.57人/回
2007年度保健学科	99.2%	1.2人/回

授業前後の同一アンケート、「コミュニケーションに対する意識」の調査ではその意識変化を比べた。(図10)

「⑧少しでもコミュニケーション力を高めたいと思う」については前も後もほぼ全員がはいと答えており、変化はみられなかったが、1~7の設問については全ての項目で自己評価が下がっていた。

■ はい □ どちらともいえない □ いいえ

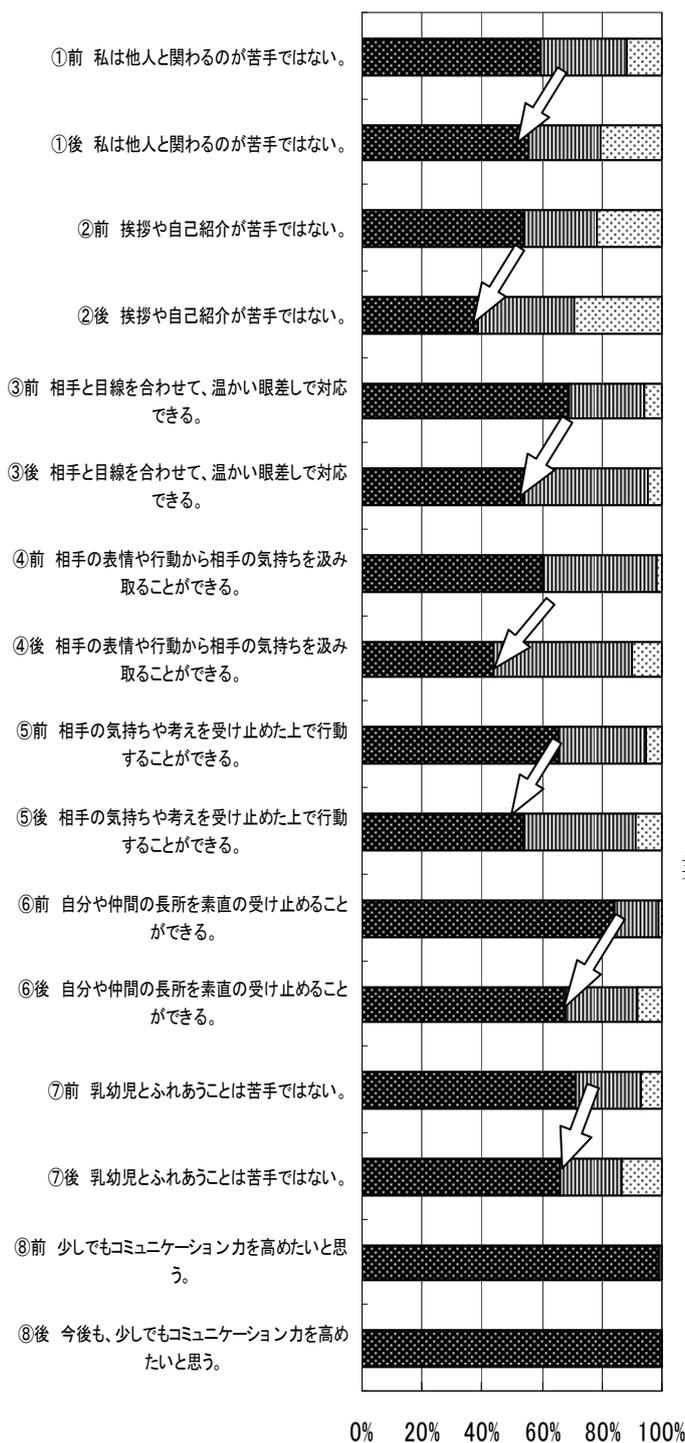


図10 実習前後の意識変化 115名

学生が授業を通して自己変化を意識しているかの調査では、8つの項目すべてにおいて60%以上の学生が良い変化を意識している。(図11)

■ はい □ どちらともいえない □ いいえ

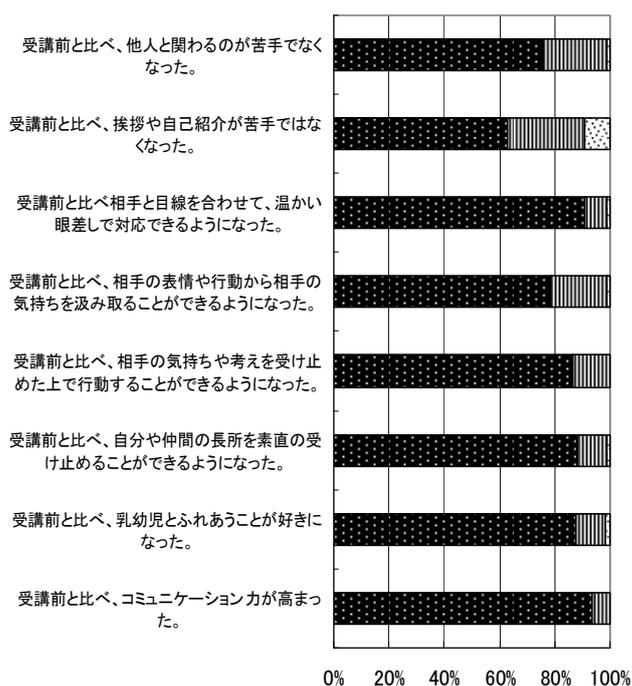


図11 授業を通しての自己変化 115名

最終レポート「成長報告書」では学生がこの授業を通して学んだと意識している項目を探った。(図12)

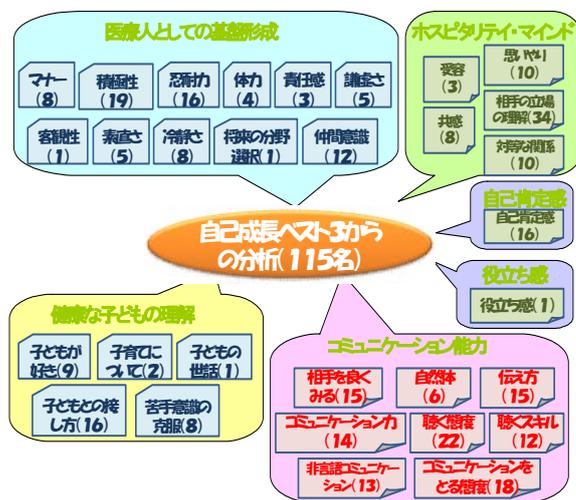


図12 成長報告書より 115名

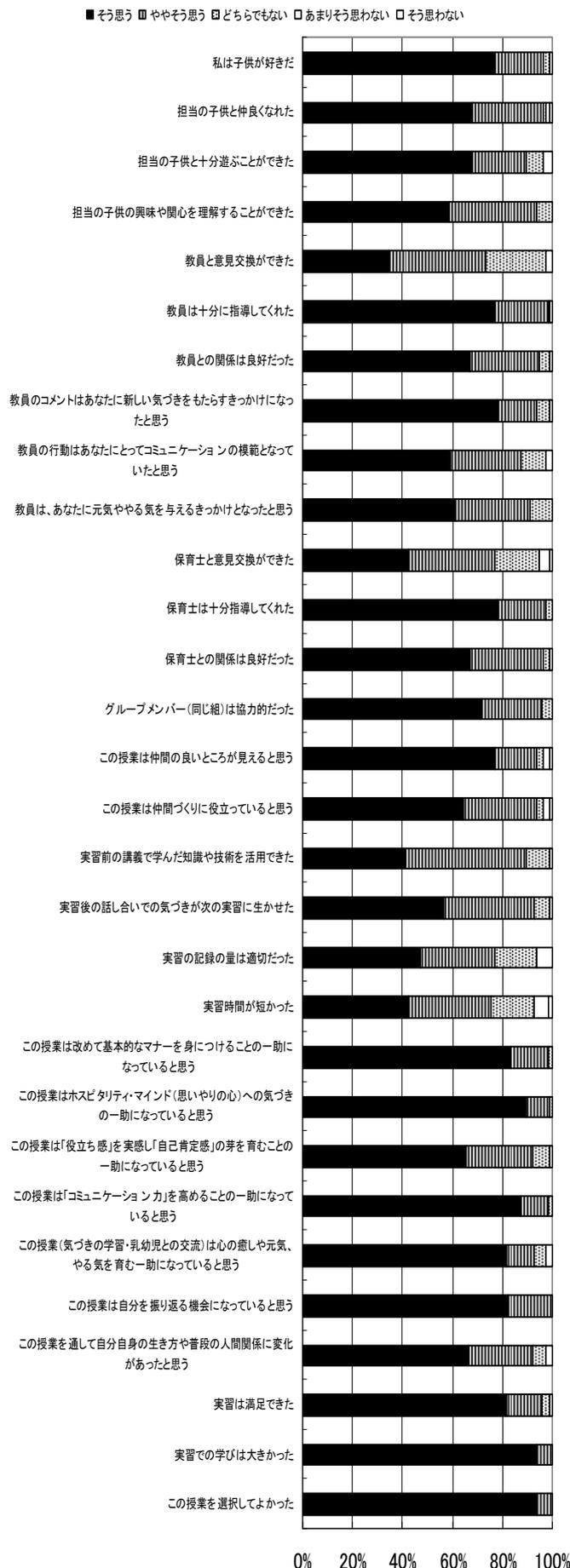


図13 授業に対するアンケート 115名

授業全体に対する学生のアンケート結果は図13のようになった。

子供に対しては約95%が「好きだ」と答えていた。子供との交流について「担当の子供と仲良くできた」「担当の子供と十分遊ぶことができた」「担当の子供の興味や関心を理解することができた」の3項目で尋ねたが、どれも90%以上が「思う」と答えた。

仲間との関係については、「メンバーは協力的だった」「仲間の良いところがみえる」「仲間作りに役立っている」項目にいずれも90%以上の学生が「思う」と答えた。

教員や保育士との関わりについて、9項目で尋ねた。7項目で90%前後の好回答が得られているが、「意見交換ができた」と実感した学生はどちらも約70%にとどまった。

授業全体の学びとしては、98%の学生が「マナーの習得」に役立ったと答えており、「ホスピタリティ・マインドへの気づき」「役立ち感、自己肯定感の実体験」についても、それぞれ99%、92%の学生が役立ったと答えた。

全ての項目で70%以上の学生が「思う」と答えていた。特に「実習での学びは大きかった」「この授業を選択してよかった」項目に関しては、100%の学生が「思う」と答えた。

<それぞれの質問に対する自由回答>

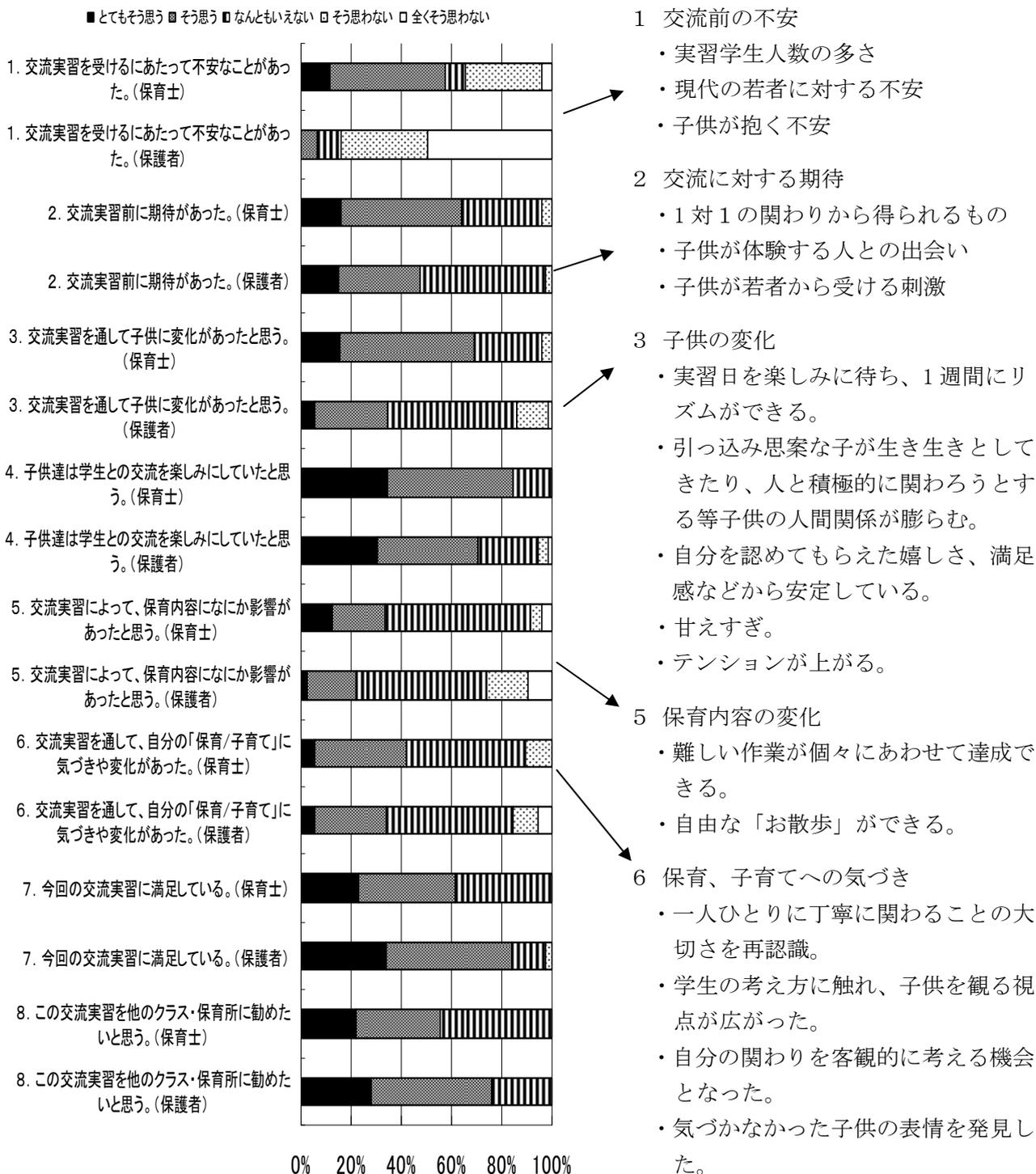


図 14 保護者、保育士のアンケート結果

②保護者、保育士のアンケートより(図14)

実習終了後に保護者、保育士の方々に、簡単なアンケート調査を行なった。

平成19年度前期は2施設において実習を行なった。アンケート回収状況は

保護者 75名 回収率 62%
保育士 26名 回収率 100% であった。

保護者、保育士に行ったアンケート結果は図14のようになった。交流実習前に抱く不安は保育士に多かった。保護者は15%と少なかった。2～8の質問については保護者、保育士とも同じような傾向がみられた。約半数が交流実習に期待をもっていた。子供たちが学生の交流を楽しんでいると感じた保護者、保育士は約80%であった。保育内容が変わったと感じた保護者、保育士は約20%と少なかった。実習に満足していると答えたのは保護者80%、保育士60%で、それはそのまま今後の実習を支持する数値と等しかった。

また、それぞれの質問に対して「思う」と回答した内容についての自由回答のうち、多かったものをグラフの横に付記した。

1.1. 考察

①学生の学びについて

授業の出席率は高く、遅刻者数も少なかった。

(表3)また、全実習を通して、遅刻をしても子供たちに会おうとする態度がみられた。自分自身に特定のパートナーが存在することが、学生にこれまでのコミュニケーション授業ではみられなかった責任感をもたらしていたのだろう。特定のパートナーの存在は、同時に実習における学生の「いるべき場所」と「なすべき役割」を明確とすることにつながり、実習に消極的な学生も自然に参加してゆける要因となった。

実習前にはコミュニケーションに対する高い自己評価があったが、実習後にはその自己評価が下がっていた。(図10)これはそれまでの人間関係の中では感じる事のなかったコミュニケーションの困難性、重要性に気づき、自己の目標が高く設定しなおされたことによるものだと考えられ

た。そのため、多くの学生が、自己評価が下がっていたにも関わらず、自分自身の変化としてコミュニケーション能力は高まったと評価していた。

(図11)

成長報告書(図12)では、学生がこの授業を通して自分自身が成長したと思われることを自由記載で3つあげた。私たちが「ねらい」とした項目に添った回答がよせられており、期待している学びができていたといえる。コミュニケーション能力に関しては115の回答が得られたとともに、実習終了後のアンケート(図13)で98%の学生が「コミュニケーション力を高めることの一助になった」と回答しており、意識の高さがうかがわれた。

子供に苦手意識を持っていた学生は少なく、多くの学生が、交流そのものを楽しんだといえる。しかし少数ではあるが苦手と感じながら実習を行っている学生が存在することは忘れてはならないと感じた。

仲間に対しての質問では、好結果がみられた。子供を介して、これまで知らなかったお互いの素顔をみることができ、また互いに協力する機会となったと考えている。実習の特徴的な部分である、「一つの保育所で一度に多くの学生を実習させる」ことが、この授業の目標である「学生の仲間作り」に役立つと思われた。

教員や保育士の関わり方はこの授業の大切な要素と考えている。今回のアンケートでは比較的良い回答を得たが、常に授業や実習の現場、そしてレポート等を通し、学生との関わりを深める重要性を感じた。また、教員と保育士間の意思疎通を図り、学生が安心して実習に取り組める環境をつくることが必須であるだろう。

この授業の目的としてあげている「ホスピタリティ・マインド」に関してはほぼ全員がそれを意識することができたと思える回答をした。基本的マナーについても同様であり、目的に沿った授業展開ができた。

「この授業を選択してよかった」「実習での学びは大きかった」項目について100%の学生が「思う」と答えていた他、ほとんどの項目で学生の評価は高く、前向きで積極的に授業に臨んでいたと思われた。それは多くの写真に見られる学生の生

き生きとした笑顔からも察することができた。

この授業ではこれまでの講義や学内演習では得られなかった行動変容がみられ、短期的な効果は認められたといえる。

この「ヒューマン・コミュニケーション」授業は、自分自身の人間関係を考える授業である。これまで自分中心であることの多い「日常の人との関わり方」を見直し、「相手の立場に立った人間関係」の築き方を学ぶ機会ともいえる。継続して特定の乳幼児(パートナー)に一生懸命向き合う中で、子供たちの笑顔やぬくもりから「人に向き合うこと」を考える。頼られ、喜ばれる実体験から得られる「役立ち感」は「自己肯定感」を生み、相手に対する責任感も育まれると考えている。

これらの学びが医療人の基盤形成として定着するかは、長期的なプログラムや長期的検討が必要であると考えているが、これまでの実践を振り返ると従来の講義や学内演習では得がたい意識・行動変容がみとめられ、この授業が対人援助に必要な能力・態度の形成のみならず、プロフェッショナル教育の基盤形成にも有用であると考えられる。

②保護者、保育士のアンケートより

この取組は、学生自身の学びと同時に、その実践が子育て支援として地域に貢献するものであることを目指している。

交流実習前に保育士が抱く不安は、一度に多数の学生を受け入れることに起因するものが多かった。しかしその不安は担当教員が常時存在すること、実習をまかせきりにしないことで緩和できただろう。保護者の不安は見知らぬ学生にわが子を預けることによるものが大きかった。現代の若者に対する不安もあった。授業の中で、学生が保護者の存在、想いを意識できるよう努めるとともに、手紙(図6,7,9)を3度作成し、渡しているが、それが学生と保護者の距離を縮めることに有効であったと考えている。また、初回の交流をスムーズにする為に、パートナーにプレゼントを作り渡したが、思いがけぬ学生からのプレゼントに喜び子供の様子も、保護者と学生の距離を縮める要因となった。これら学内演習における様々な準備は

学生の実習に対するモチベーションを高めると同時に、保護者、保育士との関係を円滑にする重要なポイントとなった。

保護者、保育士ともに実習に期待するものは大きかった。「1対1の関わり」に通常の保育では得られない期待をもっていたと思われる。

保育内容が変化したと感じた保護者、保育士は少なく、通常の保育を乱すことなく実習を行えたと考えている。子供が学生の交流を楽しみにしていたことを察することもできた。

子供の変化に「甘えすぎ」などをあげた回答もみられた。しかし同時に、子供の精神的成長の視点から考えた時、「思いきり甘える」時間も必要であるとの保育士さんからの意見もあった。

毎回交流後のレポートから、教員が学生の気づきを取りあげ作成している「学習記録」は保育所に掲示し、学生の学びや想いを伝える手段とした。アンケート結果を見ると保護者、保育士とも「自分自身の保育・子育てに変化を感じた」と思った人は40%前後あった。実習や記録を通して、学生が子どもと向かい合う姿勢を垣間見た時、それは自己の保育や育児を振り返るきっかけとなるだろう。

交流全体を通しては、半数以上が満足と回答し、「他のクラスや保育所に交流を勧めたい」と回答していた。この交流が子供の成長を支援する地域貢献となり、良い影響をもたらしたと考えられる。

そして、限られた期間ではあるが、保育園に多くのマンパワーを送り込むことができたこのユニークな試みは、学生の学びとともに地域貢献として、大学と地域のつながりを広げることができた。

8. まとめ

今回、平成18年度、19年度前期の実践を振り返り検討したところ、この授業が有用であることが示唆された。補助金の最終年度にあたる平成20年度には、更なる検討を重ねプログラムの改良をすすめてゆく。

効果検証についても学生に与える影響と共に、乳幼児に与える影響も研究してこの授業の意義を明らかにしてゆきたい。

*この授業は「みなさんが選ぶ優れた授業」で
徳島大学 平成19年度前期共通教育賞を受賞
しました。



医学生と幼児の1対1の交流：園外保育



保健学科看護学専攻学生と幼児の交流：工作



医学科学生と乳児の交流：食事介助

コミュニケーション授業 大修館書店 2007.

- 4) 高塚人志：そばにいる人から喜ばれる喜び
今井書店 2007.
- 5) 徳島大学大学院ヘルスケアサイエンス研究部：医療系
学生の保育所実習による子育て支援 初年
度報告書 I, II 2007

参考文献

- 1) 高塚人志：いのちにふれる授業 小学館
2004.
- 2) 高塚人志：いのち輝け子どもたち 今井書店
2006.
- 3) 高塚人志：いのちを慈しむヒューマン・コミ